

認定NPO法人

霧多布湿原トラスト

霧多布湿原

この風景を残したい その思いが出发点だった

美しい霧多布湿原の姿をそのまま次代に残そうと、湿原民有地の買上げ保全に取り組む団体がある。『認定NPO法人霧多布湿原トラスト』だ。

「子どもの頃から親しんできたこの風景を、来年も再来年も見続けていたい」。1986年、地元有志10人が設立した『霧多布湿原ファンクラブ』がその始まり。湿原周辺1200haにも及ぶ民有地を所有者から借受けることで、開発の手から湿原を守るのが目的だった。

ナショナル・トラストの手法として「一般的な土地の「買取り」ではなく、「借りる」というユニークな手法は口コミで全国に広がり、結成1年で会員は1000人を超えた。声高に自然保護を訴えるのではなく、ただ「ここが好き」という理由で参加できる気軽さが、人々の共感を呼んだのかもしれない。

「地元の有志以上に、霧多布湿原を好きだといってくれる人がたくさんいる」。湿原の魅力は多くの人々の感動を呼び、その大きな反響に地元のメンバーたちは感動した。

NPO法人への転換 広がりゆく保全地

結成から15年目、大きな転機が訪れる。地主から、土地の買取りを望む声が高まってきたのだ。しかし、その責任や継続性を考えると、購入に踏み切ることはできなかった。その対応策として、99年に度クラブを解散。翌年、NPO法人へと転換した。

04年には、寄付が非課税となる北海道初の認定NPO法人へ。個人会員はいまや2500を超え、91の法人が活動を支援している。地道な活動の輪は地域にも徐々に浸透し、05年10月現在の保全面積は320ha、民有地全体の約27%にまで広がった。

ラムサール条約の登録や北海道遺

産選定など、トラストの活動は広く知られるようになり、また多方面からも高く評価されるようになった。

一歩、一歩 地域と同じリズムで

「一見、困難な道程に思われるかもしれませんが、実はそれほどハードルが高かったとは感じていません」と、語るのは、クラブ創立時からのメンバーでもある三膳時子理事長。肩肘張らず、地元のリズムに合わせながら活動を行うことで、周囲も好意的に受け入れてくれるようになったのだという。

つい先日、湿原の土地を所有する地主から、土地を譲りたいとの連絡があった。引渡しを終えた後、その地主はこう話したという。「他の地主さんからも土地を譲ってもらえるよう、私の名前を出して宣伝下さい」と。全国の有志が支えるナショナル・トラスト運動の輪は、道東の小さな漁師町に確実に浸透している。



湿原を歩くための木道整備もメンバーの大きな仕事(写真右)。05年の整備は学生ボランティアのみなさんが手伝ってくれたおかげで、効率よく作業を進めることができた。作業を終えて充実感いっぱいの表情(写真下)



group

6

北海道遺産びと

豊かな水の大地に広がる、 ナショナル・トラストの輪。